子どもと保育の情景(10)

友達の思いへのイマジネーション

戸田雅美

五月のさわやかな朝、幼稚園の園庭では、さまざまな遊びが広がっていた。三輪車に乗って園庭を走りまわる子、築山にござを運んでいって山の上から下に何枚も敷き、そのござの上ををはだしで駆け下りる子、夏にはプールになる円形の場所でサッカーをやる子どももいた。砂場では、掘った穴に水を入れてはだしになって早速入ってみる子どもたちもいて、この季節のさわやかさが、子どもたちに遊びを包み込んでいるように感じられた。

三歳児の**しゅう**は、雑草の近くに、誰も使っていない三輪車を見つけると、ゆっくりと乗ってこぎだした。すると、園庭の端の、子どもたちが遊べるようにと作られた小屋の中から、四歳児の**りくと**がとび出してきた。そして、**しゅう**の三輪車に手をかけて、「だめだよ」と言う。そして、その勢いに押されて、**しゅう**は三輪車から降ろされることになってしまった。

おやおや、小さい子の三輪車を取ってしまうのかな？　小屋のそばには、ちゃんと三輪車があるから、**りくと**は、三輪車を使っているのに、違うのが欲しくなったのかな？　そんなことを考えながら見ていると、**りくと**は、**しゅう**から取り上げた三輪車を手で抑えながら、「ねえ、**りゅうたろう**くん、これ使っているんでしょ？」と聞く。聞かれた**りゅうたろう**は、雑草の中からおっとりと出てきて、「な

あに?」と聞く。どうやら、雑草の中にいる虫を見つけていたらしい。**りくと**が、「ねえ、もうこれ使わないの?」と聞くと、「うーんと…」と考えている。きっと、**りくと**と二人で、小屋を基地にしながら三輪車で遊んでいるうちに、**りゅうたろう**は、虫取りに気持ちがいってしまったらしい。「使わないの?」と**りくと**が再び聞くと、「うん、使ってる!」と元気に答える。「わかった」と**りくと**は、うれしそうに、三輪車を**りゅうたろう**の所に、押していく。

その間、**しゅう**は、ずっと**りくと**と三輪車の近くに立っていた。**りくと**は、やっと、**しゅう**の気持ちに気づいたらしい。しばらくじっと**しゅう**を見ていたが、「わかった!」と言って、園庭の端に走って行き、どうやら乗り手のいない三輪車を見つけてくると、「ほら」と**しゅう**に渡してやる。**しゅう**は、ほっとしたように、その三輪車に乗ると、そのままこいでいった。

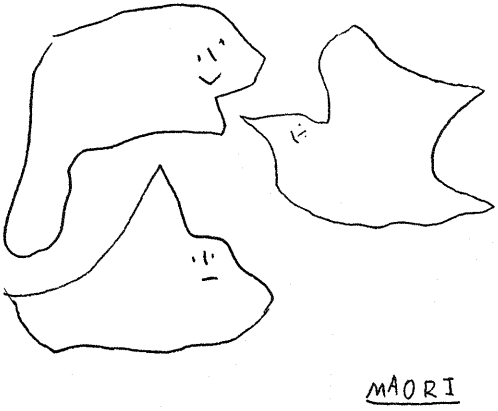
しばらくして、四歳児クラスの**やすひこ**は、**ともはる**と二人で三輪車に乗っていた。**やすひこ**が三輪車をこぎ、**とも**はるは**やすひこ**の肩に手をかけて、後ろに乗っていた。**やすひこ**は、「ぼくが、こいであげるからね。ちゃんとつかまってね」と何度も気遣っているが、見ていると、**とも**はるは案外安定して乗っている。

二人の三輪車が、三歳児の部屋の前を通りかかった時、ちょうど三歳児の**せいや**が、テラスで、外用の靴を脱いで上履きに履き替えようとしているところだった。すると、**やすひこ**が、三輪車を二人乗りしたまま、唐突に「あ―!　その靴、**とも**君のだ!」と叫ぶ。**せいや**が、**やすひこ**の言葉を気にしつつも、靴を持ったままなので、**やすひこ**は、「それ、**とも**君の靴だよ!　**とも**君の靴、取っちゃだめだよ!　返せ!」と、今度ははっきりと、**せいや**にも伝わるように言う。**せいや**は、何回か、小さい声で「これ、ぼくのだよ」と言うが、**やすひこ**たちの

三輪車とは、少し距離があるためか、うまく伝わらない。**やすひこ**は、「**とも**君の靴だよ。取るな！」と言い続ける。見ている私の目から見ると、**せいや**の手にある靴は、どう見ても小さくて、**ともはる**の靴のようには思えない。

そこへ、**やすひこ**と同じクラスの四歳児の**れい**がとんで来て、「小さい子にそんなこと言っちゃいけないんだよ！」と言う。**やすひこ**は、**れい**の言葉に一瞬、困って考えていた。だが、しばらくすると、「だって、この子が、**とも**君の靴取ったんだよ」と再び主張する。**れい**が、二人の足に目を向けると、二人ともはだしで三輪車に乗っている。**れい**は、本当に靴を取られたのかもしれないと思ったらしく、今度は**れい**のほうが、考える表情になる。そして、先ほどよりは遠慮がちに「でも、小さい子にそんな言い方しちゃだめだよ…」と言うと、どうしたものかと困った様子で立っている。

そこへ、三歳児の担任がやって来て、「先生きょう朝来た時見ていたんだけどね、この靴は、**せいや**君の靴だよ」と言う。「もしかして、**とも**君、**せいや**君の靴と同じこの飛行機の絵のついた靴をもっているんじゃない？　それで、**やっ**ちゃんは、**とも**君の靴だと思ったんじゃない？」と話しかける。それでも、**やすひこ**は、「えー、だって、その靴、**とも**君のなんだよ」と繰り返す。と、その時、それまで



ずっと無言だった**ともはる**が、ぽそっと「今日は、アンパンマンの靴だった」と言う。

それを聞くと、**れい**は、「えー、じゃ、**とも**君のじゃないの？」とにこっとし、担任も、「よかったね、**せい**ちゃん、**とも**君はきょうは違う靴はいて来たんだって」と**せいや**を安心させた。**やすひこ**は、（そんな…）というような表情で、**ともはる**を見たり、**せいや**を見たりしていたが、しばらくすると、**ともはる**を乗せたまま三輪車を走らせて行ってしまった。

幼稚園の生活の中で、友達ができると、友達の気持ちに思いをはせて、自分ができることをしてあげたいと思うようになる。気持ちが、友達のためにしてあげることでいっぱいになると、そのことによって困ることになる別の子どもの気持ちにまで思いをはせることは難しい。一方、心をかけてもらっている友達のほうも、自分のことを思ってその事態が起こっていることに、すぐに気づくことは、意外に難しい。その子どもはその子どもで、自分なりに没頭している遊びがあったり、そもそも、誰かが自分のために、しかも自分が頼んだわけでもないのに、「こと」を起こしてくれているとは、思いも及ばないことも多いからである。

考えてみれば、大人の人間関係の中にもこんなすれ違いはたくさんある。むしろ、人間関係というものは、互いに互いの思いへのイマジネーションを働かせながらも、決して効率よくいくことばかりではなく、誤解やすれ違いも多いものである。それにもかかわらず、人は人への思いをはぐくみ、おせっかいともいえる関係を生きていく。

子どもたちも幼稚園の生活の中で、人間関係をつくり育てる主体として、一生懸命に、そして柔軟に考えながら生きていることに改めて気づかされた朝だった。

（東京家政大学）